

巻頭言

仙台市病院事業管理者 仙台市立病院院長 亀山元信

仙台市立病院医学雑誌第36巻が電子版として発刊されることになりました。最近、投稿論文数が減少傾向にあるとは言え、多忙な日常診療の中で努力された執筆者、編集委員の方々に敬意を表します。

一昨年の2016年11月に、現在地である仙台市太白区あすと長町の新病院に移転致しました。移転前後の様々な混乱期を職員が一丸となって乗り切り、周囲からは「チャレンジングですね。」と半ば無謀視された、移転と同時の電子カルテ導入も、現在では診療上必須のツールとなっています。様々な問題点は当然あるにせよ、まずは概ね順調な移転後の経過と考えています。

一方、人口減少や少子高齢化の急速な進展など、医療を取りまく社会の環境は大きな変革の渦に巻き込まれており、我々自治体病院といえどもこれから進むべき方向性を見誤れば、淘汰されていく、非常に厳しい状況下におかれています。具体的な要因として、1) 全国の二次医療圏ごとに各医療機関が果たすべき役割を明確化し、地域全体として医療を支えていこうとする「地域医療構想」、2) 我々公立病院が地域医療構想を踏まえて、持続可能な経営を目指して自ら策定することが求められている「新公立病院改革プラン」、3) 日本専門医機構による2017年度からの導入は延期になったものの、18の基本診療領域で進められてきた「新専門医制度」、4) さらに消費税問題、などがあります。

もちろん我々が日々の診療の中でなすべきことは、患者さんに最善の医療を提供することに他なりません。エビデンスレベルの高い治療方法を前提として、さらなる紹介患者の確保、他の医療機関・地域の先生方からの救急患者受入れや救命コールを中心とする重症患者のスムーズな受入れ、より踏み込んだ入退院支援、そして患者さんを中心とした多数/多職種のプロフェッショナルが連携・協調して行うチーム医療の展開、これらを支える業務の標準化、等々が我々に求められています。

医療の質の向上には、一人ひとりの自主的な研鑽が欠かせません。時には自らの業務内容を振り返り、先人の研究を学び、参考にして、学会発表につなげ、そして論文/レポートにまとめるプロセスは極めて重要な意義を有しています。その意味でも本誌を今以上に効果的に活用し、仙台市立病院における医療レベル向上に役立てて頂く事を心より願っております。